

## 日本における保存図書館の発達と課題

鰐部 美香

保存図書館とは、主に「保存機能に重点を置いた図書館」として定義されている図書館である。海外においては、特にアメリカの大学図書館が共同で設立していることが多い。日本において、1950年代から保存図書館についての必要性は論じられてきたものの、その設立を実現している事例は少ない。

本研究の目的は、資料の保存における保存図書館の意義を明らかにすること、また、日本で保存図書館が大きく発達してこなかった理由および背景について考察することにある。調査方法として、文献調査と訪問調査を行う。文献調査では、イギリス・アメリカ・日本の保存図書館の定義を調査した。訪問調査では、対象となった図書館に訪問し、その機能や取り組み、現状等について質問項目を作成し、調査を行った。調査対象は、立教大学新座保存書庫、法政大学イノベーション・マネジメント研究センター、名古屋市鶴舞中央図書館、滋賀県立図書館資料保存センター、神奈川県資料室研究会(科学技術系外国語雑誌デポジット・ライブラリー)、農林水産研究情報総合センター、協同組合図書資料センター、NPO 法人共同保存図書館・多摩の計 8 館である。

文献調査の結果、保存図書館の定義について、海外においては、単語及び意味の変遷があったものの、1970年代に Deposit library にコレクションを保管する図書館という定義が付されてからは、現在に至るまで変更されていない。日本においては、保存図書館とデポジットライブラリーという2つの単語が用いられ、保存図書館が保存を重視するのに対して、デポジットライブラリーは保存と利用を重視するものと定義されている。

訪問調査の結果、現在日本で活動している保存図書館が、保存に重点を置く保存図書館ではなく、保存と利用に重点を置くデポジットライブラリーに非常に近いものということが明らかになった。特に、現物資料を重点的に保存する理由や、その図書館機能の範囲における回答の中で、その傾向が顕著にみられた。

日本における保存図書館の意義として、初期から現在まで保存図書館はその参加館に対する支援を中心とし、近年になるとデジタル化に対する意義も誕生した。実際に活動している保存図書館では、書庫の狭隘化の解消という意義も大きな意味を持っている。

保存図書館がその活動を十分に成しえなかったのはいくつかの原因がある。ひとつは、当初から全国規模の保存図書館を目指したために、図書館界の動きが追い付かなかったことである。保存図書館の機能として、当初保存に重点が置かれて認識をされていた点も問題である。また、現在求められている保存図書館のシステムがデポジットライブラリー的な要素を強く持ち、他館との協力を重点を置いているために、図書館間の協力が必要不可欠である。

(指導教員 白井哲哉)